

クリストファー・アレグザンダー

ウィーン生まれ. 米国籍 ① 1936年生まれ(84才) ② ケンブリッジ大学 → ③ ハーバード大学 → ④ カリフォルニア大学バークレー校 教授

「形」の合成に関するノート (1964)

→ 1971年再版時、この本のエッセンスは「ダイアグラム(図解)」=「パターン」であるといっている。

「パタンの可能性の源はパタンの「自立性」にある。」「パタンはお互いに干渉だから...」

前提として...

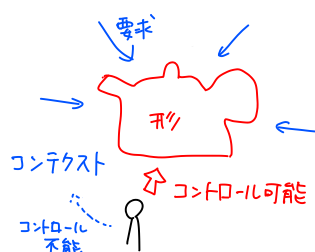
- ① 建設が求められていた時代背景
- ② 時間の中でゆくり適合できる社会文化環境でない。
- ③ デザイナーが問題に十分に対処できないまま。
「芸術家」として独特のものを、直感頼みでつくっている。
- ④ その中で、コンテキストに適合したものをつくりたい。

現実の試行錯誤は、
あまりにも高価で、
あまりにも遅い。(17)

デザイナーらがより恣意的でないやり方で、
要求群を処理し、形態化できる方法論を!

★ 形とコンテキスト → これらのアンサンブルを目指す。

「形とは、我々がコントロールできる世界の一部であって、
その世界の他の部分をそのままにしておきながら、我々が
姿を与えることのできる部分である。コンテキストとは、
この世界の形に対して要求を提示している部分である。
...適合性とは、形とコンテキストが相互を受け入れ
あう関係のことである。」(15)



★ 良い適合 = 不適合がないこと。

有限な一覧表として要求項目を数えあげたい。

「実際における良い適合の概念は、
そのような欠点がないことだけを
表しているのだから...」(19)

不適合な項目 → 1
不適合でない項目 → 0
として、系全体が0になればよいと考えた。

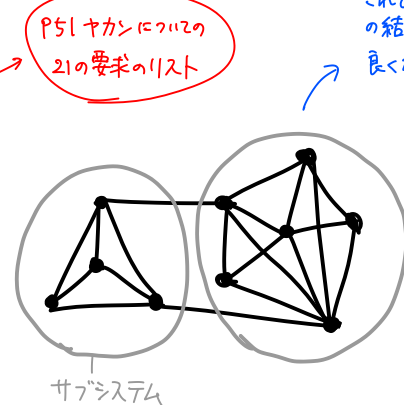
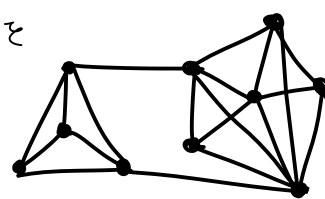
→ 不適合を全て取り除くこと = 適合/デザイン、と定義

★ 要求項目どうしの関係

要求項目どうしは利害関係を
もっている。(一方が0になると
他方が1になる、など)

↓
1つ1つの項目を操作して、
全て0にするのは不可能

↓
ある程度、近い利害関係
(同時に0になるような集合)
をサブシステムとして扱う。



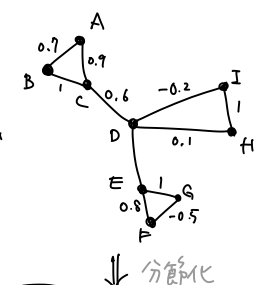
理想的には...



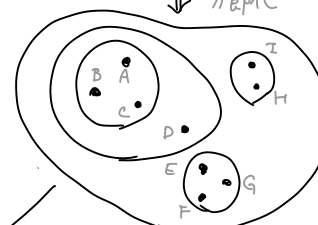
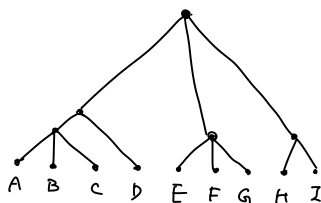
アレグザンダーは
これでも他のサブシステムと
の結線が残っているので
良くないとした。

★ 要求項目群からプログラムへ

項目群の関係の重みづけ(±も含め)を行い、
結線(リンク)の弱いところ3に境界線を引き、
集合としてあらわす。



↓
集合はツリー状にあらわせる。



★ プログラムからダイアグラムへ

「すべてのデザインのイニシアチブでは、デザイナーは
要求の集合を、その物理的な関係をとらえて、
ダイアグラムに番号訳しなければならぬ。」(78)

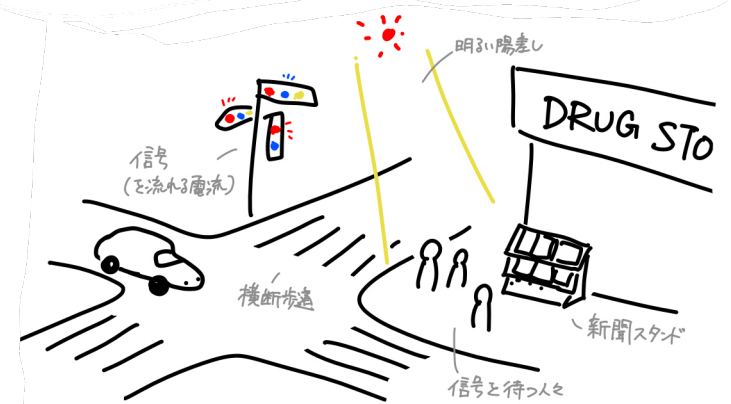
利害の近い
サブシステムが
形態・空間の
どの部分と対応するの?

※ 流行のデザイナーの偏見をよいものと見ていない
→ 本質主義・質量形相論, Form follows function. 的。

「パタン・ランゲージ」は、セミラチスに
なるために、むしろサブシステム間の結線を
許した。(そのために要求項目ではなくパタンと付けあがった)
+
パタンどうしの関係づけに詩的感性・質を求めた。

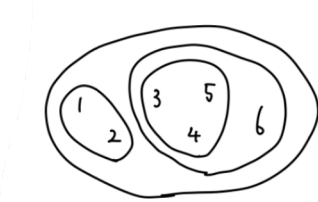
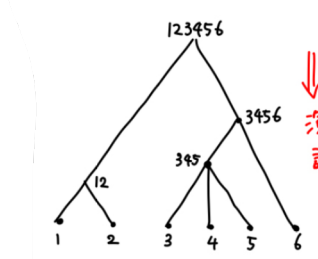
「都市はツリーではない」(1965)

アレグザンダーのツリーとセミラチス



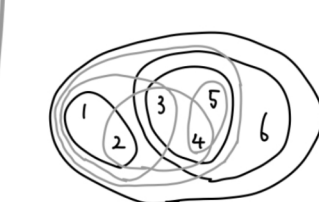
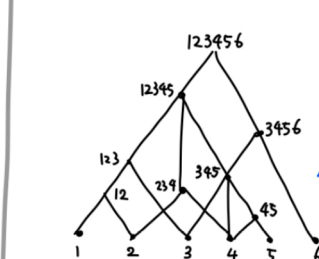
セット...有限の要素から、ひとまとまりの
意味ある組み合わせ(システム)群が縁起
→ 「断続的に縁起し消滅していくもの」(183)

ツリー(人工都市)



→ 1つの要素は1つのセットに
のみ所属

セミラチス(自然都市)



→ 1つの要素が複数の
セット(システム)に所属

セミラチスは複数のツリーの重ね合わせ。

自尊心の強い少年 → スケートボーダー

ライアン・ポテン

都市空間を「遊び場」として読み替える